

ほんのりとピンクの頬に浮かぶえくぼ。

歩くたび、肩先で揺れるやわらかな髪。

そんなものにくるまれて、亜実ちゃんはいつもキラキラ輝いている。

「でも、びっくりしたー」

亜実ちゃんのすこしおどけた声がして、わたしはあわてて「えっ？」と顔をあげた。

「だって、いきなりなんでもん。びっくりだよ」

「だよね、いきなりパチンだもんね」

「パチンじゃない、パチンだよ、パチン」

三年生の高瀬さんが二年一組の教室に怒鳴りこんできたのは、あとすこしで朝の予鈴が鳴るときだった。

「佐々木亜実って、どの子！」

凍りついたようなみんなの視線を追って、つかつかと亜実ちゃんの前に立つと、高瀬さんはいきなり亜実ちゃんの頬をたたいた。

「なによ、ちょっとかわいいからって。バドミントン部の男子に、かたっぱしから手を出してるってうわさだけど、立花くんはあたしとつきあってるんだからね」

一方的にいいまくって高瀬さんが出ていくと、とたんに教室にざわめきもどった。

ある子はぬらしたハンカチで亜実ちゃんの頬を冷やし、ある子は「暴力女！」と高瀬さんをののしり、ある子は亜

実ちゃんをニヤニヤとながめ。

そんななか、わたしは亜実ちゃんの背中をなでていた。高瀬さん、どうしてわかんないのかなあ、と思いつながら。

亜実ちゃんは、相手かまわず手をのばしたりしない。

でも、みんな、亜実ちゃんと手をつなぎたがる。

立花先輩だって、そう。いつも先輩を見てたから、すこし前から気づいていた。亜実ちゃんをみつめるときだけ、先輩の目がすうっとやわらぐってことを。その目に、すぐとりにいるわたしは映っていないってことも。

でも、しかたない、と思う。

亜実ちゃんが放つキラキラした光がまぶしすぎて、わたしはだれからも見えないのだろう。

「ねえ、さやちゃん」

亜実ちゃんが、つんとわたしの腕をつついた。

交差点の前。亜実ちゃんはこのまままっすぐ、わたしは左に曲がる。

「ひさしぶりに、駅ビルとかに遊びにいかない？」

「ごめん、今日はダメなんだ。おかあさんが保護者会だから、かわりに付き添いすることになってるの」

「そっか。おばあちゃん、大変なんだったよね。ごめん」

亜実ちゃんの目じりがわずかにさがる。

「おばあちゃん、元気になるといいね」

「うん、ありがと」